

# 学びの源泉 三谷 宏治

第 11 号 旅に学ぶ—日本（沖縄・与論編）

## #人の中

「与論島」って、どこにあるか分かるだろうか？  
都道府県としては鹿児島県だが、場所は沖縄本島のすぐ北、九州からは南に 200km 下ったところに位置する。珊瑚礁に囲まれた、バスで一周 40 分、人口 6 千人の南の楽園である。

いや、別世界と言うべきであろうか。日々、都会の時間と環境で生きている我々にとって、この南海の孤島での学びは深い。

今回の舞台である与論も沖縄も、きっかけは浪人時代の友人だ。1981 年の春 3 月末、見事に受験に失敗し、浪人生となった私は、ひとり東京、お茶の水にいた。駿河台予備校への入学手続きのためだ。（因みにその時の「駿台入試」は生涯最高の出来だった・・・遅すぎる・・・）

駿台 3 号館 7 階の臨時幹旋会場で下宿を探した私は「駿台生専門」「<sup>まかな</sup>贈り付き」「改築直後」等々の言葉に惹かれ、高円寺のある下宿を選んだ。

結果として、そこはあらゆる意味で私の予想と期待を裏切り、超える、驚異の下宿屋だった・・・

見かけは一般の住宅なのだが、そこにはなんと 11 人の浪人生がいた。駿台生は私ともう一人だけ。その一人は 3 浪生で他の下宿人と一切関わりを持たず（出会っても挨拶しない）、当時「ソビエト（不可侵領域の意）」と呼ばれていた。

他の 10 名も浪人生なのだが、うち、生活時間帯が同じ、つまり普通に予備校に通って勉強をしている者は<sup>わず</sup>僅かに 4 名。残りの 6 名の生活は謎であった。夜、一緒にコンビニに行くくらいしか共通時間が

ない。

ただ、この友人達の「巾」は非常に広く、私に色々なことを教え、見せてくれた。未だにこれほど<sup>ききょう</sup>奇矯で貴重な友人たちは、他にいない。

その中に、与論人と沖縄人がいた。10 名の内、この 2 名が最初に友だち同士となっていたのだが、当初、他の 8 名は、彼らを外国人だと思っていた。

彼らの方言（北琉球語）での会話が、全く理解できなかったからだ。実際には与論の方言と沖縄那覇の方言はかなり違う（らしい）のだが。

彼らは飛び抜けて面白かった。考え方や行動が。

「なんとかなるさあ！」だし「やるよ、オレ」だ。たった 500 円を賭けただけで、冬の大噴水（高円寺駅南口前にある）に<sup>ちゅうちよ</sup>躊躇無く飛び込もうとするヤツらだった。「オレ、100 円でもやるよ！」

この友人たちは、もちろん私を全く特別扱いしない。平気で話を<sup>さえぎ</sup>遮るし、平気でぶつ（私もぶち返す）。頭もスキルもポジションも関係ない、ヒトはヒトなのだ。それだけだ。

当然のことだ。

## #古代人のおおらかさ

琉球語の特長の一つに「母音の<sup>しゅくたい</sup>縮退」がある。つまりは「あいうえお」の五音が「あいういう」の三音になってしまっているのだ。

故に「底（SOKO）」は「スク（SUKU）」に「瓶（KAME）」は「カミ（KAMI）」となる。よって「瓶の底」は「カミノスク」。

他にも面白い規則的变化がある。与論では H が P

となることだ。花はパナ (HANA→PANA)、人はピチュ (HITO→PITU)。

これは実は中世日本語の発音に等しい。江戸時代、日本人は「はひふへほ」を「パピプペポ」と発音していたらしいのだ。与論や沖縄にはそういう古代の日本が残っているとも言える。

人の資質も、そうかもしれない。江戸時代 300 年間に叩き込まれた農民根性ではなく、おおらかで大胆な古代日本人の心を彼・彼女らは持っている。

沖縄県の婚姻率、離婚率、出生率、失業率はどれも高い。全国 47 都道府県の内、各々 2 位、1 位、1 位 (ダントツ)、2 位 (大阪に抜かれた) である。

嫁に行っても働きに行っても「イヤなら帰って来い」と引力が働く。古き良き血縁主義・大家族主義に支えられた自立的相互扶助とも言える。離婚率や失業率の高さは琉球的秩序の「懐の深さ」なのだ。

これらは一方、本土から来た管理職にとっては悪夢である。

時間を守らない、約束を守らない、叱ると辞める、気に入らないと辞める……。本土的常識の中ではとても生きていけない。

でも管理職たちはきっと人生の楽しみ方、流し方、を学んで帰って行く。「なんとかなるさあ！」

これが本土で通用するかどうかは、また問題ではあるが……

## # 与論・沖縄生活が教える「こだわらなさ」「明るさ」

学生時代、与論の友人宅に 3 泊した。朝起きて食事をよばれ、借りた 50cc バイクで 5 分、東の海岸に出る。泳ぎ、寝転び、家に戻り昼食を取る。昼は暑すぎるから浜には出ない。部屋でお昼寝だ。

夕方、5 時過ぎに西の海岸に行く。バイクで 10 分。ラグビー型に潰れた大きな夕陽が海に沈むまで、泳ぎ、寝転ぶ。家に戻り夕食を取る。友人と 3 時間飲んで喋って、寝る。

これを 3 回、繰り返した。特に凄い会話も出来事もない 3 日間だ。しかし、とにかく空と海が圧倒的に、広い。そして友人もその家族たちも、広い。干渉することなく、日中はほぼほったらかし。これ程の気楽さがあるだろうか。

これで、いいのだ。

与論から沖縄・那覇に戻り、友人宅に 2 泊した。友人は自分の遊びで忙しく、私はまたもやほったらかし。

またまた 50cc バイクを借りて、地図借りて、取り敢えず東へ、そして北へと向かう。

青空の下、アスファルトの道を走ると、対向車がワイパーを動かしている。何ごとかと思っていると、見る間に積乱雲が近づいてくる。そして 20 分後に風景は雨に飲み込まれる。

あまりの豪雨に雨宿りをし、雲が去るのを待つ。30 分後に日が戻り、そしてまた青空の下、バイクを走らせる。

沖縄の上には青空と雲があり、風が吹いていた。浜辺には水が寄せ、米軍基地とコンピナートがあった。至る所に戦場の史跡があり、祈りと、そして明るさがあった。

## # 浪人生活で学んだ「教育技術」と「読書中」

1981 年 4 月、浪人生となって東京に引っ越してきた私を待っていたものは「改築直後」ではなく「改築中」の下宿屋だった。

ドアのガラスも、壁のクロスも、備え付けのベッドもなく、おが屑が散らばるガランとした部屋。呆然<sup>ぼうぜん</sup>

とする私に、下宿屋のオバさんはサラリと「ごめんねー、間に合わなかったの」「今日はどこかに泊まってきた」。

敷金も家賃も振り込み済みで、親しい親戚もおらず、他に住む場所のあてなどない。どこかに泊まれと言われてもホテルの場所の一つも知らない。

軽い絶望感と共に、深夜の渋谷を 1 人さまよい、ボーリング場の近くのビジネスホテルに潜り込んだ。暗い部屋をボーリング場のネオンが照らす。

逃げる術はなかったが、逃げ出したくなった。

でも本当に逃げなくて良かった。それから浪人生としてのマジメで不思議な 1 年が始まる。

そして、大きな世界が広がっていく。

浪人時代の収穫は、これら奇矯な友人だけでなく、実はもう 2 つある。それは「教育」と「読書」だ。

毎日毎日、丸ノ内線に乗ってお茶の水の駿台に通う規則的な生活。欠席は大雪の日の 2 日間だけ。高校を全部で 30 日間サボった私にしては驚異の出席率だ。

で、午前中はまじめに授業を受ける。ここでの学びが 1 つ。そして午後は全てサボって友人と本屋(三省堂)に行く。ここでの学びがもう 1 つ。

授業の風景はこんな感じだ。

4 人座りの長机が教室にぎっしり。しかも授業開始直前になると、他クラスの間がどんどん入ってきて全ての通路、余白を埋める。教壇に教科書を広げ講師を見上げる強者もいる。

国立理系のトップクラスであった我がクラスには、駿台きっての講師陣が集められていたために、それを聴講すべく人が集まっていたのだ。(もちろん規則違反)

しかし確かに、その価値はあった。講師陣は何れも確固とした教育の技と方法論を持ち、かつ人格者

であった。

今でも忘れられない言葉がある。

「君たちは現役生にセンスで負けたんだ」

「だから、センスでなく知識と解法で勝つしかない。これから 1 年、徹底的に解き方を教える。それで絶対勝てるから」

なんという独善的自信。我々は反発する余裕もなく、逆にある意味深く安堵した。

彼(数学担当)はその言葉通り、全ての問題に対し複数の解法を提示した。「戦略 1 座標と方程式で解く」「戦術 1 直交座標を使う」「戦術 1-1 直交座標の原点をすらすら」・・・「戦略 2 ベクトルで解く」・・・等々。

これ自体が新鮮だった。

1 つの問いに答えは 1 つ。でも解法やアプローチは無限にある。我々が学ぶモノの本質は全て繋がっているのだ。

それまで、ある意味、自学自習だった私にとって、教わることの楽しみを知った最初の経験だった。授業は楽しくできる、教えることは総合的な技術なのだ。

もう 1 つは読書の中。

読書の中で学んだことは、この連載の前半で述べたが、読書そのものの巾を拡げて行ったのはこの浪人時代なのだ。

なにしろヒマだったので(流石に一日 15 時間も勉強なんてしてられない)、手当たり次第に本(お金はないので文庫本中心)を読んだ。

その手始めが司馬遼太郎の「竜馬がゆく(全 8 巻)」だった。

ヒマでなければ、浪人してなかったら、あれらの本を読んだかどうか。

マンガの最終回でも書いたけれど、「ヒマ」は大切

な人間の本質。意識的に、創り出そう。そして、気の向くままにそれを過ごそう。

そう、南の島で、が良いかもしれない。

初出：CAREERINQ. 2005/12/01